

小春の狐

泉鏡花

青空文庫

朝——この湖の名ぶつと聞く、蜆しじみの汁で。……爛かんをさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参のウイスキーを一口。蜆汁にウイスキーでは、ちと取合せが妙だが、それも旅らしい。……

いい天気で、暖かかったけれども、北国ほつこくの事だから、厚い外套がいとうにくるまって、そして温泉宿を出た。

戸外の広場の一廓ひとつくわ、総湯の前には、火の見の階子はしごが、高く初冬の空を抽ぬいて、そこに、うら枯れつつも、大樹の柳の、しつとりと静しずかに枝垂しだれたのは、「火事なんかありません。」と言ひそうである。

横路地から、すぐに見渡さるる、汀みぎわの蘆あしの中に舳みよしが見え、艫ともが隠れて、葉越葉末に、船頭の形が穂そよを戦たたかがして、その船の胴に動いている。が、あの鉄鎚てつづいの音を聞け。印半しるしはんて纏んの威勢のいいのでなく、田船を漕こぐお百姓らしい、もつさりとした布子ぬのこのなりだけども、船大工かも知れない、カーンカーンと打つ鎚つちが、一面の湖の北の天そらなる、雪の山の

頂に響いて、その間々に、

「これは三保の松原に、はくりよう伯良と申す漁夫にて候。万里の好山に雲忽ちに起り、一楼の明月に雨始めて晴れたり……」

と謡うのが、遠いが手に取るように聞えた。——船大工が謡を唄う——ちよつと余所にはない気色だ。けしき……あまつさえ、地震の都から、とぼんとして落ちて来たものの目には、まるで別なる乾坤である。てんち

脊の伸びたのが枯交り、疎になつて、蘆が続く……かたわらきなや傍の木納屋、とまや苦屋の袖には、しらしく嫁菜の花が咲残る。……あの戸口には、羽衣を奪われた素裸の天女が、手鍋を提げて、その男のために苦勞しそうにさえ思われた。

「これなる松にうつくしき衣掛れり、寄りて見れば色香妙にして……」

と謡っている。木納屋の傍は菜畑で、真中に朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐に青貝ほどの小朝顔が縋つて咲いて、つるの下に朝霜の焚火の残つたような鶏頭が幽に燃えている。その陽だまりは、山霊に心あつて、一封のみじの音信を投げた、玉章のように見えた。たまずさ

里はもみじにまだ早い。

露地が、遠目鏡とおめがねを覗く状に扇形おうぎなりに展ひらけて視ながめられる。湖と、船大工と、幻の天女と、描ける玉章を搔乱かきみだすようで、近く歩あゆみを入るには惜おしいほどだったから……

私は――

（これは城崎関弥きんぎせきやと言う、筆者の友だちが話したのである。）

――道をかえて、たとえば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄い霧に包まれた、白砂の小松山の方に向ったのである。

小店の障子に貼紙はりがみして、

（今日より昆布こぶまきあり候。）

……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかったが、これから漫歩そぞろあるきというのに、こぶ巻は困る。張出しの駄菓子に並んで、笹ざるに柿が並べてある。これなら袂たもとにも入ろう。「あり候」に挨拶あいさつの心得で、

「おかみさん、この柿は……」

天井裏の蕃椒とうがらしは真赤だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顔を出して、

「その柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ渋が抜けねえだでね。」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きく奴も、聞く奴だが、

「早うて、……来月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まったく山家やまがはのん気だ。つい目と鼻のさきには、化粧煉瓦けしやうれんがで、露台バルコニーと言うのが建っている。別館、あるいは新築と称して、湯宿一軒に西洋づくりの一部は、なくてはならないようにしている盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、おかしな事がある。……くどいと不可いけない。道具だてはしないが、硝子戸がらすどを引きめぐらした、いいかげんハイカラな雑貨店が、細道とつぎにかかる取着的角にあった。私は靴だ。宿の貸下駄で出て来たが、あお桐の二本歯で緒が弛ゆるんで、がたくり、がたくりと歩行あるきにくい。此店ここで草履を見つけたから入ったが、小児こどものうち覚えた、こんな店で売っている竹の皮、藁わらの草履などは一足もない。極く雑なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒し

落^やれている。いやどうも……柿の渋は一月半おくれても、草履は駢^{かけ}足^{あし}で時流に追着く。

「これを貰^{もら}いますよ。」

店には、ちょうど適齡前の次男坊といった若いのが、もこもこの羽織を着て、のっそりと立っていた。

「貰^はつて穿^はきますよ。」

と断つて……早速ながら穿替えた、——誰も、背負^{しよ}つて行く奴もないものだが、手一つ出すでもなし、口を利くでもなし、ただにやにやと笑つて見ているから、勢い念を入れなければならなかったのだ。……

「お幾^{いく}干^{くら}。」

「分りませんなあ。」

「誰かに聞いてくれませんか。」

若いのは、依然としてにやにやで、

「誰も今居^おらんのですね……」

「じゃあ帰途^{かえり}に上げましょう。じきそこの宿に泊つたものです。」

「へい、大きに——」

まったくどうものんびりとしたものだ。私は何かの道中記の挿絵に、土手の薄^{すすき}に野苺^{のばら}の実がこぼれた中に、折敷^{おしき}に栗を塩尻に積んで三つばかり。細竹に筒をさして、四^しもんと、四つ、錢の形を描き入れて、傍^{そば}に草鞋^{わらじ}まで並べた、山路の景色を思出した。

二

「この蕈^{きのこ}は何と言います。」

山^{やま}沿^{ぞい}の根笹^{こながれ}に小流^{こながれ}が走る。一方は、日^ひ当^{あたり}の背戸を横手に取って、次第^{まばら}疎^{わらや}に蕈^{きのこ}屋がある、中に半農——この潟^{かた}に漁^{すなど}って活計^{たつき}とするものは、三百人を越すと聞くから、あるいは半漁師——少しばかり商いもする——蕈屋草履は、ふかし芋とこの店に並べてあった——村はずれの軒を道へ出て、そそけ髪で、紺の筒袖^{うわつぱり}を上^{うわつぱり}被^はにした古女房が立って、小さな笹^{まつきいろ}に、真黄色^{まつきいろ}な蕈^もを装^もつたのを、こう覗^{のぞ}いている。と笹^{やっ}を手にして、服装^{なり}は見すばらしく、顔も窈^{やう}れ、髪は銀杏^{いちようがえし}返^{がえし}が乱れているが、毛の艶^{つや}は濡れたような、姿のやさしい、色の白い二十^{はたち}あまりの女^{たち}がゐる。

蕈は軸を上にして、うつむけに、ちよぼちよぼと並べてあった。

実は——前年一度この温泉に宿った時、やつぱり朝のうち、……その時は町の方を歩行あいて、通りの煮染屋にしめやの戸口に、手拭てぬぐいを頸くびに菅笠すががさを被かぶった……このあたり浜から出る女の魚売てんびんが、天秤てんびんを下した処おろに行きかかつて、鮮あたらしい雑魚あたらに添えて、つまといった形で、おなじこの蕈たけのこを簀すいに装ったのを見た事があつたのである。

銀杏もえぎの葉ばかりの鰈かれいが、黒い尾でぴちぴちと跳ねる。車くるま蝦えびの小蝦こえびは、鮎あめいろ色いろに重かさなつて萌葱もえぎの脚をぴんと跳ねる。魴ほうほうの鰭ひれは虹にじを刻み、飯い鮓だこの紫は五つばかり、断ちぎれた雲のようにふらふらする……こち、めばる、青、鼠、樺かばいろ色のその小魚こうおの色に照映てりはえて、黄なる蕈たけのこは美しかった。

山国に育ったから、学問の上の知識はないが……蕈たけのこの名なの十とやら十五は知っている。が、それはまだ見た事がなかった。……それに、私は妙に蕈たけのこが好きである。……覗のぞ込んで何と言いますかと聞くと「霜こしや。」と言った。「ははあ、霜こし。」——十一月初旬で——松まつ蕈たけはもとより、しめじの類にも時節はちと寒過ぎる。……そこへ出盛でる蕈たけのこらしいから、霜を越すという意味か、それともこの蕈たけのこが生えると霜が降る……霜を起すと言うのかと、その時、考ひまうる隙ひまもあらせず、「旦那だんなさんどうですね。」とその魚売てんびんが簀すいをひよいと

突きつけると、煮染屋の女房が、ずんぐり横肥りに肥った癖に、口の軽い^{ひようきん}剽^{ひようきん}軽^{ひようきん}もので、「買^かうてやらさい。旦那さん、酒^{さかな}の肴^{さかな}に……はははは、そりやおいしい、猪^{しし}の味^{あじ}や。」と大口を開けて笑った。——紳士淑女の方々に高い声では申^{もうしか}兼ねるが、猪はこのあたりの方言で、……お察しに任せたい。

唄で覚えた。

薬師山から湯宿を見れば、ししが髪結^ゆて身をやつす。

いや……と言つたばかりで、外^{ほか}に見当は付かない。……私はその時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁^{にげ}足^{あし}に急いだつてが——笑うものは笑え。——そよぐ風よりも、湖^{あお}の蒼^{あお}い水が、蘆^{あし}の葉^はごしにすらすらと渡つて、おろした荷^{にげ}の、その小魚^{さかな}にも、葦^{あし}にも颯^{さつ}とかかる霜^{しも}こしの黄茸^{きんけ}の風情^{ふうせい}が忘れられない。皆とは言わぬが、再びこの温泉に遊んだのも、半ばこの葦^{あし}に興じたのであった。

——ほぼ心得た名だけれど、したしいものに近づくとて、あらためて、いま聞いたのである。

「この葦は何と言います。」

何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違いない。——その真中へ顔を入れたのは、考えると無作法千万で、都会だと、これ交番で叱られる。

「霜こしやがね。」と買手の古女房が言った。

「綺麗だね。」

と思わず言った。近優りする若い女の容色に打たれて、私は知らず目を外した。

「こちらは、」

と、片隅に三つばかり。この方は笠を上にした茶褐色で、霜こしの黄なるに対して、女郎花の根にこぼれた、茨の枯葉のようなのを、——ここに二人たった渠等女たちに、フト思い較べながら指すと、

「かつば。」

と語音の調子もある……口から吹飛ばすように、ぶつきらぼうに古女房が答えた。

「ああ、かつば。」

「ほほほ。」

かつぱとかつぱが願合せをしたから、若い女は、うすよこれたが姉さんかぶり、茶摘、桑摘む絵の風情の、手拭の口に笑をこぼして、

「あの、川に居ります可恐いものではありません、雨の降る時にな、これから着ますな、あの色に似ておりますから。」

「それで幾干やな。」

古女房は委細構わず、箆の縁に指を掛けた。

「そうですね、これでな、十銭下さいまし。」

「どれらい事や。」

と、しよぼしよぼした目を睜つた。睨むように顔を視めながら、

「高いがな高いがな——三銭や、えつと気張つて。……三銭が相当や。」

「まあ、」

「三銭にさつせえよ。——お前もな、青草ものの商売や。お客から祝儀とか貰うようには行かんぞな。」

「でも、」

と蕈きのこが映す影はないのに、女の臉まぶたはほんのりする。

安値やすいものだ。……私は、その言い値に買おうと思つて、声を掛けようとしたが、隙すきが

ない。女が手を離すのと、箆を引手ひったく繰るのと一所で、古女房はすたすたと土間へ入って行

く。

私は腕組をしてそこを離れた。

以前、私たちが、草鞋わらじに手鎌、腰兵糧こしびようろうというものの美しい結束で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩つても、見た数ほどの蕈を狩り得た験ためしは余りない。

たった三銭——気の毒らしい。

「御免なして。」

と背後うしろから、跽音あしおとを立てず静しずかに来て、早や一方は窪地の蘆あしの、片路かたみちの山の根を摺すれ違い、慎ましかに前へ通る、すり切草履きれに踵かかとの霜。

「ああ、姉さん。」

私はうつかりと声を掛けた。

三

「——旦那さん、その虫は構うた事には叶かないませんわ。——煩うるそうてな……」
もの言いいもやや打解けて、おくれ毛を撫なでながら、

「ほつとお通りなさいますと、ひとりでに離れます。」

「随分居るね、……これは何と言う虫なんだね。」

「東京には居りませんの。」

「いや、雨上りの日当りには、鉢前などに出はするがね。こんなに居やしないようだ。よくも気をつけはしないけれど、……（しようじよう）よりもっと小さくって煙けむのようだね。……またここにも一団ひとかたまりになっている。何と言う虫だろう。」

「太郎虫と言いますか、米搗虫こめつきむしと言うんですか、どっちかでございましょう。小さな児こが、この虫を見ますとな、旦那さん……」

と、言ことばが途絶えた。

「小さな児が、この虫を見ると？……」

「あの……」

「どうするんです。」

「唄はやをうとうと囃はやしますの。」

「何と言つて……その唄は？」

「極きまりが悪うございますわ。……（太郎は米搗き、次郎は夕な、夕な。）……薄暮合うすくれあいには、

よけい沢山たんと飛びますの。」

……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴間に、私たちもやつぱり唄った。

「仲よくしましょう、さからわないで。」

私はちよつかいを出すように、面おもてを払い、耳を払い、頭を払い、袖を払った。茶番の最さ明寺いみようじどのような形を、更あらためて静しずかに歩行あるいた。——真一文字の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱がいだ外套がいとうは、その女が持つてくれた。——歩行あるきながら、

「……私は虫と同じ名だから。」

しかし、これは、虫にくらべて謙遜した意味ではない。実は太郎を、浦島の子なぞらに擬なぞえて、潜ひそかに思い上った沙汰さたなのであった。

湖はるを遙はるかに、一廊ひとくるわ、彩色した竜うろこの鱗のごとき、湯宿々々の、壁、柱、蓑いらかを中に隔へてて、いまは鉄鎚てつづの音、謡の声も聞えないが、出崎の洲すの端はたに、ぽつりと、烏帽子えぼしの転ころがった形になって、あの船も、船大工も見える。木納屋とまやの苦屋は、さながらその素袍すわうの袖である。

——今しがた、この女が、細道をすれ違った時、葦きに敷いた葉を残した笹ざを片手に、行ゆ

く姿に、ふとその手鍋提げた下界の天女の倅を認めたのである。そぞろに声掛けて、「あの、輩を、……三銭に売ったのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの価値でも説く事か、天女に対して、三銭也を口にする。……さもしうようだが、対手が私だから仕方がない。「ええ、」と言うのに押被せて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言いねの半分には買ってもらいたかったのだけれど、「旦那さんが見てであつたしな。……」と何か、私に対して、値の押問答をするのが極が悪くもあつたらしい口振で。……「失礼だが、世帯の足になりますか。」ときくと、そのつもりではあつたけれど、まるで足りない。煩つていなさる母さんの本復を祈つて願掛けする、「お稲荷様のお賽錢に。」と、少しあれだが、しなやかな白い指を、縞目の崩れた昼夜帯へ挟んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥袋とも見えず挟つて、腰帯ばかりが紅であつた。「姉さんの言い値ほどは、お手間を上げます。あの松原は松露があると、宿で聞いて、……客はたて込む、女中は忙しいし、……一人で出て来たが覚束ない。ついでに、いまの（霜こし）のありそうな処へ案内して、一つでも二つでも取らして下さい、……私は茸狩が大好き。——」と言つて、言ううちに我ながら思入つて、感激した。

はかない恋の思出がある。

もう疾に、余所の歴きとした奥方だが、その私より年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連立った。男、女たちも大勢だった。茸狩に綺羅は要らないが、山深く分入るのではない。重箱を持参で莫蔭に毛氈を敷くのだから、いずれも身ぎれいに装った。中に、襟垢のついた見すばらしい、母のない児の手を、娘さん——そのひとは、厭わしげもなく、親しく曳いて坂を上ったのである。衣の香に包まれて、藤紫の雲の裡に、何も見えぬ。冷いが、時めくばかり、優しさが頬に触れる袖の上に、月影のような青地の帯の輝くのを見つつ、心も空に山路を辿った。やがて皆、谷々、峰々に散って茸を求めた。かよわいその人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遙に、開いた丘に、少しのぼせて、羽織を脱いで、蒔絵の重に片袖を掛けて、ほっと憩らったのを見て、少年は谷に下りた。が、何を秘そう。その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母の塚であつた。

向った丘に、もみじの中に、昼の月、虚空に澄んで、月天の御堂があつた。——幼い私は、人界の茸を忘れて、草がくれに、偏に世にも美しい人の姿を仰いでいた。

弁当に集った。吸筒の酒も開かれた。「関ちゃん——関ちゃん——」私の名を、——誰も呼ぶもののないのに、その人が優しく呼んだ。刺すよと知りつつも、引つかんで声を

堪えた、茨の枝に胸のうずくばかりなのをなお忍んだ——これをほかにしては、もうきこえまい……母の呼ぶと思う、なつかしい声を、いま一度、もう一度、くりかえして聞きたかったからであつた。「打棄つておけ、もう、食いに出て来る。」私は傍の男たちの、しか言うのさえ聞える近まにかくれたのである。草を噛んだ。草には露、目には涙、縋る土にもしとしと、もみじを映す糸のような紅の清水が流れた。「関ちゃん——関ちゃんや——」澄み透つた空もやや翳る。……もの案じに声も曇るよ、と思うと、その人は、たけだちよく、高尚に、すらりと立つた。——この時、日月を外にして、その丘に、気高く立つたのは、その人ただ一人であつた。草に縋つて泣いた虫が、いまは堪らず蟋蟀のように飛出すと、するすると絹の音、颯と留南奇の香で、もの静なる人なれば、せき心にも乱れずに、衝と白足袋で氈を這つて肩を抱いて、「まあ、可かつた、怪我をなさりはしないかと姉さんは心配しました。」少年はあつい涙を知つた。

やがて、世の状とて、絶えてその人の倂を見る事の出来ずなつてから、心も魂もただ憧憬に、家さえ、町さえ、霧の中を、夢のように徜徉つた。——故郷の大通りの辻に、老舗の書店の軒に、土地の新聞を、日ごとに額面に挿んで掲げた。表三の面上段に、絵入りの続きもののあるのを、ぼんやりとゝんで見ると、さきの運びは分らないが、ちようど

思合つた若い男女が、山に茸^{たけがり}狩をする場面である。私は一目見て顔がほてり、胸が躍つた。——題も忘れた、いまは臆^{おぼろげ}気であるから何も言うまい。……その恋人同士の、人目のあるため、左右の谷へ、わかれわかれに狩入つたのが、ものに隔てられ、巖^{いわ}に遮られ、樹に包まれ、兇^{くせもの}漢に襲われ、獸に脅かされ、魔に誘われなどして、日は暗し、……次第に路を隔てつつ、かくて両方でいのちの限り名を呼び合うのである。一句、一句、会話に、声に——がある……がある……！ が重る。——私は夜^よも寝られないまで、翌日の日を待ちあぐみ、日ごとにその新聞の前に立つて読み耽^{ふけ}つた。が、三日、五日、六日、七日になつても、まだその二人は谷と谷を隔てている。！……も、——も、も、邪魔なように焦^{じれ}つたい。が、しかしその一つ一つが、峨^が々^がたる巖^{いわ}、森とした樹立^{こだち}に見えた。くとう紙が青かった。それが澄渡つた秋深き空のようで、文字は一^{ひと}つもみじであつた。作中の娘は、わが恋人で、そして、とぼんと立つて読むものは小さな茸^{きのこ}のように思われた。——石になつた恋がある。少年は茸になつた。「関弥。」ああ、勿体ない。……余りの様子を、案^{たん}じ案^{たん}じ捜しに出た父に、どんと背中を敲^{たた}かれて、ハツと思つた私は、新聞の中から、天^て狗^{いぬ}の翼^{はね}をこぼれたようにぽかんと落ちて、世に返つて、往來^{ゆきき}の人を見、車を見、且つ屋根

越に遠く我が家の町を見た。――

なつかしき茸狩よ。

二十年あまり、かくてその後、茸狩らしい真似をさえする機会がなかったのであった。
「……おとしますわ。でも、大勢で取りますから、茸きのこがあればいいんですけど……」

湯の町の女は、先に立つて導いた。……

湖のなぐれに道を廻めぐると、松山へ続くなわて賑らしいのは、ほかほかと土が白い。草のもみじを、嫁菜のおくれ咲が彩つて、枯蘆かれあしに陽が透通る。……その中を、飛交うのは、琅玕ろうかんのようないなき蟲であつた。

一つ、別に、この賑を挟んで、大なる渦が湧いたように、刈田を沈め、鵝かいつぶりを浮かせたのは一昨日の夜の暴風雨の余残なごりと聞いた。蘆の穂に、橋がかかると渡つたのは、横に流るる川筋を、一つらにびようびよう渺々と汐しおが満ちたのである。水は光る。

橋たもとの袂にも、蘆の上にも、随所に、米つき虫は陽炎かげろうのごとくに舞つて、むらむらむらと下へ巻き下つては、トンと上つて、むらむらとまた舞いさがる。

一筋の道は、湖の只中ただなかを霞の渡るように思われた。

汽車に乗つて、がたがた来て、一泊幾干いくちの浦島に取つて見よ、この姫君さえせんえつ僭越であ

る。

「ほんとうに太郎と言います、太郎ですよ。——姉さんの名は？……」

「……………」

「姉さんの名は？……」

女は幾度も口籠りながら、手拭てぬぐいの端を俯目ふしめに加えて、

浪路なみじ。……」

と言った。

——と言うのである。……読者諸君みなさん、女の名は浪路だそうです。

四

あれに、翁おきなが一人見える。

白砂の小山の畦道あぜみちに、菜畑の菜よりも暖かそうな、おのが影法師を、われと慰むように、太い杖つえに片手づきしては、腰を休め休め近づいたのを、見ると、大黒頭巾だいこくずきんに似た、饅頭形まんじゅうがたの黄なる帽子を頂き、袖なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛巾けぎんちやくを着のぞを覗

かせた……片手に網のついた畚びくを下げ、じんじん端折はしよりの古足袋に、藁草履わらぞうりを穿はいてい
る。

「少々、ものを伺います。」

ゆるい、はけ水のこながれ小流の、一段ちよろちよろと落口を差覗いて、その翁の、また一息
憩やすろうた杖に寄つて、私は言つた。

翁は、頭ずなりに黄帽子を仰向け、髻ひげのない円顔の、鼻の皺しわ深く、すぐにむぐむぐと、日ひ
向なたに白い唇を動かして、

「このの、私わしがいま来た、この縦筋を真直まつすぐに、ずいずいに行かっしやると、松原につい
て畑を横に曲る処があるでの。……それをどこまでも行かせると、沼があつての。その、
すぼんだ処に、土橋が一つ架かつてゐるわい。——それぞれ、この見当じや。」

と、引立てるように、片手で杖を上げて、釣竿つりざおを撓ためるがごとく松の梢こずえをさした。

「じやがの。」

と頭かぶりを緩く横に掉ふつて、

「それをば渡つてはなりませぬぞ。（と強く言つて）……渡らずと、橋の詰つめをの、ちと後あと
へ戻るようなれど、左へ取つて、小高い処あかを上らつしやれ。そこが尋ねる実盛塚さねもりづかじやわ

いやい。」

と杖を直す。

安宅あたかの関の古蹟とともに、実盛塚は名所と聞く。……が、私は今それをたずねるのではなかった。道すがら、既に路傍みちばたの松山を二一処ふたとこばかり探したが、浪路がいじらしいほど気を揉もむばかりで、茸も松露も、似た形さえなかったので、獲ものを人に問うもおかしいが、且かつは所在なさに、連つれをさし置いて、いきなり声を掛けたのであったが。

「いいえ、実盛塚へは——行こうかどうかと思っっているので、……実はおたずね申しましたのは。」

「ほん、ほん、それでは、これじやろうの。」

と片手の畚くわを動かすと、ひたひたと音がして、ひらりと腹かえを翻うした魚うおの金色こんじきの鱗うろこが光った。

「見事な鯉こいですね。」

「いやいや、これは鮒ふなじやわい。さて鮒ふなじやがの……姉あねさんと連立たつせえた、こなたの様子で見ればや。」

と鼻の下を伸のばして、にやりとした。

思わず、その言に連れて振返ると、つれの浪路は、尾花で姿を隠すように、私の外套で顔を横に蔽いながら、髪をうつむけになつていた。湖の小波が誘うように、雪なす足の指の、ぶるぶると震えるのが見えて、肩も袖も、その尾花に靡く。……手につまざるのは、真紅の茨の実で、その連る紅玉が、手首に珊瑚の珠数に見えた。

「ほん、ほん。こなたは、これ。（や、爺い……その鮒をば俺に譲れ。）と、姉さんと二人して、渦に放いて、放生会をさつしやりたそうな人相じゃがいの、ほん、ほん。おはは。」

と笑いながら、ちよろちよろ滝に、畚をぼちやんとつけると、背を黒く鮒が躍つて、水音とともに鰭が鳴った。

「憂慮をさつしやるな。割いて爺の口に啖おうではない。——これは稲荷殿へお供物に献ずるじや。お目に掛けましての上は、水に放すわいやい。」

と寄せた杖が肩を抽いて、背を円く流を覗いた。

「この魚は強いぞ。……心配をさつしやるな。」

「お爺さん、失礼ですが、水と山と違いました。」

私も笑った。

「茸だの、松露だのをちつとばかり取りたいのですが、霜こしなんぞは、どの辺にあるでしょう。御存じはありませんか。」

「ほん、ほん。」

と黄鰻頭を、點頭のままに動かして、

「茸——松露——それなら探さねば爺にかて分らぬがいやい。おはは、姉さんは土地の人じゃ。若いぱつちりとした目は、爺などより明かじや。よう探いてもらわつしやい。」

「これはお隙^{ひま}づいえ、失礼しました。」

「いや、何の嵩^{かさ}高^{たか}な……」

「御免。」

「静^{しず}にござれい。——よう遊べ。」

「どうかしたか、——姉さん、どうした。」

「ああ、可^こ恐^おい。……勿体ないようで、ありがたいようで、ああ、可^こ恐^おうございましたわ。」

「……………」

「いまのは、山のお稻荷様か、潟の竜神様でおいでなさいましょう。風のない、うららか

な、こんな時にはな、よくこの辺をおあるきなさいますそうですから。」

いま畚を引上げた、水の音はまだ響くのに、翁は、太郎虫、米搗虫の霽もやのあなたに、影になつて、のびあがると、日南ひなたの背せも、もう見えぬ。

「しかし、様子は、霜こしの黄茸きただけが化けて出たようだったぜ。」

「あれ、もつたいない。……旦那さん、あなた……」

五

「わ、何じやい、これは。」

「霜こし、黄茸たけ。……あはは、こんなばばきのこ蕈たけを、何の事じやい。」

「何が松露や。ほれ、こりや、破ると、中が真黒まつくろけで、うじやうじやと蛆うじのような筋のある（狐の）鞆丸がりまじやがいの。」

「旦那、眉毛に唾つばなとつけつしやれい。」

「えろう、女狐に魅つままれたなあ。」

「これ、この合羽かつばしめじ占地茸はな、野郎の鼻毛が伸びたのじやぞいな。」

戻道。橋で、ぐると私たちを取巻いたのは、あまのじやくを訛つたか、「じやあま。」
 と言ひ、「おんじや。」と称え、「阿婆。」と呼ぶる、浜方 屈 竟の阿婆摺媽々。町
 を一なめにする魚売の阿媽徒で。朝商売の歸りがけ、荷も天秤棒も、腰とともに大
 胯に振つて来た三人づれが、蘆の横川にかかったその橋で、私の提げた筧に集つて、口
 々に喚いて囃した。そのあるものは霜こしを指でつついた。あるものは松露をへし破つて、
 チエツと言つて水に棄てた。

「ほれ、ほんとうの霜こしを見さつしやい。これじやがいの。」

と尻とともに天秤棒を引傾げて、私の目の前に揺り出した。成程違ふ。

「松露とは、ちよつと、こんなものじや。」

と上荷の筧を、一人が敲いて、

「ぼんとして、ぷんと、それ、香しかる。」

成程違ふ。

「私が方には、ほりたての芋が残つた。旦那が見たら蛸じやろね。」

「背中を一つ、ぶん撲つて進じようか。」

「ばば茸持つて、おお穢や。」

「それを食べたなら、肥料桶こえおけが、早桶になつて即死じゃその、ペツペツペツ。」
私は茫然ぼうぜんとした。

浪路は、と見ると、悄然しょうぜんと身をすぼめて首垂うなだるる。

ああ、きみたち、阿媽おつかあ、しばらく……

いかにも、唯今ただいま申さるる通り、較くらべては、玉と石で、まるで違う。が、似て非なるにせよ、毒にせよ。これをさえ手に狩るまでの、ここに連れだつ、この優しい女の心づかいを知つてゐるか。

——あれから菜畑を縫いながら、更に松山の松の中へ入つたが、山に山を重ね、砂に砂、窪地の谷を渡つても、余りきれいで……たまたま落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木の葉もなかった。

この浪路が、気をつかい、心を尽した事は言うまでもなからう。

阿媽、これを知つてゐるか。

たちまち、口紅のこぼれたように、小さな紅茸べにたけを、私が見つけて、それさえ嬉しくつて取ろうとするのを、遮つて留めながら、浪路が松の根に気も萎なえた、袖褻そでつまをついて坐つた時、あせつた頬は汗ばんで、その頸脚えりあしのみ、たださしのべて、討たるように白か

った。

阿媽、それを知ってるか。

薄色の桃色の、その一つの紅茸を、ともしび灯のごとく膝の前に据えながら、袖を合せて合掌して、「小松山さん、山の神さん、どうぞ茸を頂戴な。きのこ下さいな。」と、やさしく、あどけない声して言った。

「小松山さん、山の神さん、

どうぞ、茸を頂戴な。

下さいな。——」

真の心は、そのままに唄である。

私もつり込まれて、こゝろえ低声で唄った。

「ああ、ありました。」

「おお、あつた。あつた。」

ふと見つけたのは、ただ一本、スツと生えた、いっすんぼし侏儒がしづじやのめ渋蛇目傘を半びらきにしたような、しやれ洒落ものの茸であつた。

「旦那さん、早く、あなた、ここへ、ここへ。」

「や、先刻見た、かつぱだね。かつぱ占地茸……」

「一つですから、一本占地茸とも言いますの。」

まず、枯松葉を箆に敷いて、根をソツと抜いて据えたのである。

続いて、霜こしの黄茸を見つけた——その時の歓喜を思え。——真打だ。本望だ。

「山の神さんが下さいました。」

浪路はふたたび手を合した。

「嬉しく頂戴をいたします。」

私も山に一礼した。

さて一つ見つかると、あとは女郎花おみなえしの枝ながらに、根をつらねて黄色に敷く、泡のようなの、針のさきほどのまじも交った。松の小枝を拾って掘った。尖さきはとがらないでも、砂地だからよく抜ける。

「松露よ、松露よ、——旦那さん。」

「素晴らしいぞ。」

むくりと砂を吹く、飯蛸いいたこの乾からびた天窓あたまほどなのを搔くと、砂を被かぶつて、ふらふらと足のようなものがついて取れる。頭をたたいて、

「飯蛸より、これは、海月くらげに似ている、山の海月だね。」

「ほんになあ。」

じゃあま、あばあ、阿媽おつかあが、いま、（狐がりまの鞆丸）ぞと呟のしつたのはそれである。

が、待て——葦狩たけがり、松露取たけなわは闌いの興に入つた。

浪路は、あちこち枝くぐを潜つた。松を飛んだ、白鷺しらさぎの首か、脛はぎも見え、山鳥の翼の袖も

舞つた。小鳥のように声を立てた。

砂山の波かさなが重り重つて、余りに二人のほかにながらない。——私はなぜかゾツとした。あ

の、翼、あの、帯が、ふとかかる時、色鳥とあやまられて、鉄砲で撃たれはしまいか。——

——今朝も潜水夫のごときしたたかな扮装いでたちして、宿を出た銃獵家てつぽううちを四五人も見たものを。

遠くに、黒い島の浮いたように、脱ぎすてた外套がいとうを、葉越に、枝越すかに透して見つけて、

「浪路さん——姉さん——」と、昔の恋に、声かくもつた。——姿を見失つたその人を、

呼んで、やがて、莞爾にっこりした顔を見た時は、恋人にめぐり逢つた、世にも嬉しさを知つた

のである。

阿婆おばあ、これを知つてるか。

無理に外套に掛けさせて、私も憩つた。

着崩れた二子織ふたこの胸は、血を包んで、羽二重なめらかよりも滑である。

湖の色は、あお空と、松山の翠みどりの中に朗ほがらかしに沁み通った。

もとのように、就なかんずくはるか中遥なみぎわに離れた汀について行く船は、二艘そとう、前後に帆を掛けて漕すべつ

たが、その帆は、紫に見え、紅あかく見えて、そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチさえずと囀った。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、いかに阿媽おつかあたち、——この趣を知ってるか。——

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「この狐。」

と一人が、浪路の帯を突きざまに行き抜けると、

「浜でも何人抜かれたやら。」一人がつづいて頤あごで掬すくった。

「また出て、魅ぼかしくさるずらえ。」

「真昼間まつびるまだけでも遠慮せいでや。」

「女の狐の癖にして、罌丸がりまをつかませたは可笑おかしなや、あはははは。」

「そこが化けたのや。」

「おお、可^こ恐^わやの。」

「やあ、旦那、松露など、黄茸など、ほんものを売ってやろかね。」

「たかい錢^{おあし}で買わっせえ。」

行過ぎたのが、菜畑越に、纏^{もつ}れるように、一^{いつ}斉^{とき}に顔を重ねて振返った。三面六臂^{ろっぴ}の夜^や叉^{しや}に似て、中にはおはぐろの口を張ったのがある。手足を振って、真黒^{まっくろ}に喚^{わめ}いて行く。

消入りそうなを、背を抱いて引留めないばかりに、ひしと寄った。我が肩するる婦^{おんな}の髪^{あだ}に、櫛^{くし}もささない前髪に、上手がさして飾ったように、松葉が一葉、青々としかも婀娜^{あだ}に斜^{はす}にささって、（前こぞう）とか言う簪^{かんざし}の風情そのままのを、不思議に見た。茸^{たけ}を狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟のごとく、おのずから挿さったのである。

「ああ、嬉しい事がある。姉さん、茸^{たけ}が違っても何でも構わない。今日中のいいものが手に入ったよ——顔をお見せ。」

袖でかくすを、

「いや、前髪をよくお見せ。——ちよつと手を触って、当てて御覧、大したものだ。」

「ええ。」

ソツと抜くと、掌たなそこに軽くのる。私の名に、もし松があらば、げにそのままの刺青いれずみである。

「素晴らしい簪かんざしじゃあないか。前髪にさきつて、その、容子ようすのいい事と言ったら。」

涙が、その松葉に玉を添えて、

「旦那さん——堪忍して……あの道々、あなたがお幼いちいさ時のお話もうかがいます。——真のあなたのお頼みですのに、どうぞして思つても、一つだつて見つかりません……嘘と知つていて、そんな茸をあげました。余り欲しゅうございましたので、私にも、私にかつてほんとうの茸に見えたんですもの。……お恥かしい身体からだですが、お言ことばのまま、あの、お宿までもお供して……もしその茸をめしあがるんなら、きつとお毒味を先へして、血を吐くつもりでおりました。生命いのちがけでだしました。……堪忍して下さいまし。」

「何を言うんだ、飛んでもない。——さ、ちよつと、自分の手でその松葉をさして御覧。……それは容子かかが何とも言えない、よく似合う。よ。頼むから。」

と、かさに掛つて、勢いきおいよくは言いながら、胸が迫つて声が途切れた。

「後生だから。」

「はい、……あの、こうでございますか。」

「上手だ。自分でも髪を結えるね。ああ、よく似合う。さあ、見て御覧。何だ、袖に映したって、映るものかね。ここは引^{ひき}汐^{しお}か、水が動く。——こつちが可^いい。あの松影の澄んだ処^{ところ}が。」

「ああ、御免なさい。堪忍して……映すと狐になりますから。」

「私が請合う、大丈夫だ。」

「まあ。」

「ね、そのままの細い翡翠^{ひすい}じゃあないか。琅玕^{ろうかん}の珠^{たま}だよ。——小松山の神さんか、竜神が、姉さんへのたまものなんだよ。」

「ここにも飛交^{いなか}う蟲^{みどり}の翠^{すい}に。——

「いや、松葉が光る、白金^{ブラチナ}に相違ない。」

「ええ。旦那^{なさけ}さんのお情^{なさけ}は、翡翠です、白金です……でも、私はだんだんに、……あれ、口が裂けて。」

「ええ。」

「目が釣^つ上^あって……」

「馬鹿な事を。——^{きのこ}蕈^{きのこ}で嘘^{うそ}を吐^ついたのが狐なら、松葉でだました私は狸^りだ。——狸^りだ。……

…

と言つて、真^{まっしろ}白^{しろ}な手を取つた。

湖つづき 蘆^{あしな}中^{なか}の静^{しず}な川^かを、ぬしのない小船^{せうせん}が流れた。

大正十三（一九二四）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二巻」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小春の狐

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>